# 「清和文楽を継ぎ伝えること、これが僕の仕事になった」

## 義太夫 倉岡寿典さん

「浄瑠璃の節回しでお客さんをよべるようになれたら…」

清和文楽は、上益城郡清和村に代々伝わる人形芝居。宝暦（一七五一～六四）のころ、豊後竹田（現大分県）から伝わり、村人たちが、農作業のかたわらの余興として上演、守り継いできたものです。が、数座あったと言われる芝居も、ここしばらくは清和文楽保存会によって細々と演じられる程度でした。

その清和村に平成四年、清和文楽館が完成。今年四月には、文楽の本場である淡路島での二年間の修行を終えた倉岡寿典さんが戻ってきました。そして、三十数年ぶりに本格的な清和文楽人形芝居が復活したのです。三味線と浄瑠璃（語り）を担当する若い倉岡さんに伝統芸能について語っていただきました。

### テープで頑張ってきた祖父や父たち

僕のひいおじいさんは、人形を遣っていて清和文楽保存会の会長を務めた人です。父も、そのおじいさんに連れられて文楽の野舞台をよく見に行っていたそうです。今は、保存会の会員で、農業のかたわら人形遣いをしています。

実は、清和村にはここ三十数年、三味線方と浄瑠璃を語る義太夫がいなかったので、父たちは、拍手や雑音が入り混じったテープを聞きながら人形を操っていたんです。村は、十年ほど前から、文楽を守り伝承するために、清和文楽保存会を中心に「文楽の里づくり」を始めましたが、その第一弾が二年前に完成した清和文楽館。そして、次に生演奏で人形芝居をすること！僕の淡路島研修だったんです。僕自身は、それまで家から出たことがなかったから、「一人暮らしもいいなあ」ぐらいの軽い気持ちだったんです。

### 途中で投げ出したくはない

そりゃ、淡路島の「淡路人形座」では、三味線と語りをびっちり仕込まれました。たった二年間で舞台に立てるようにしようというのだから、教える方も習う方も必死です。「淡路人形座」の方でも僕のような長期研修生を受け入れたのは初めてだったんです。僕は三味線を持つのも聞くのも初めて。浄瑠璃にしても、まず意味が分からない。もう、十年分くらい怒られてきました（笑）。でも、練習がつらいと思ったことはありませんでした。途中で投げ出したくはない。「淡路人形座の同じ若い人には負けたくない」。そんな気持ちがだんだん強くなっていって…。

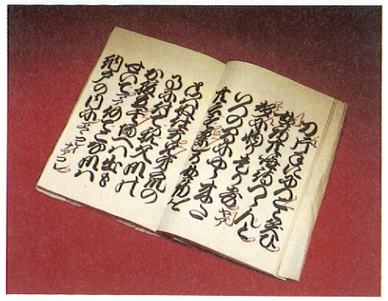
### 先人たちへの感謝と伝承の核としての自覚と

一つの外題（げだい）を完成するのに、何年も掛かります。やればやるほど難しいし、この道は終わりということがありません。そこが魅力でもあるんですけど。

今となっては、叱ってくれる先生が近くにいないことが一番つらいですね。自分の三味線も浄瑠璃も不満だらけです。こんなに未熟なのに舞台に出ていいのかと…。もっともっと練習して、見る人に感動を与えられるようになったらいいなあと思います。

文楽館の若手職員五人で、文楽を勉強していこうと、暇な時は人形に触ったりしています。今は自分のことで精一杯だけど、いずれは伝承者を育てていかなくちゃと思います。そのために淡路島に行って来たのだから…。

清和文楽は、江戸時代からずっと村人が育ててきたもの。中には清和村がいっぱいつまっています。散逸していた人形や衣装を集めて復興させた大正期の人。保存会を結成して舞台や人形を修復し、浄瑠璃を練習した人。そして、文楽をこよなく愛した村の人たち。僕が今、文楽をやれるのも、先人たちが清和文楽を大切に守り伝えてくれたから。感謝しています。



「客席に子どもが多い時は、分かりやすい言葉に変えたりすることも」

くらおか　ひさのり

■プロフィール
1972年　上益城郡清和村生まれ
1991年　県立矢部高等学校卒業コンクリート製造会社にコンピュータのオペレーターとして入社
1992年　同社を退社。清和文楽館に就職と同時に淡路島「淡路人形座」に研修
1994年　淡路島研修より帰熊4月に初舞台を踏む